

067

令和7年度 広島大学光り輝き入試
総合型選抜 社会人型・フェニックス型

小論文問題

<経済学部経済学科夜間主コース>

令和6年11月16日(土)

自 9時00分

至 10時30分

答案作成上の注意

1. この問題冊子は、表紙を含み3ページ(片面のみ)です。
2. 解答用紙は2枚、下書き用紙は3枚です。
3. 受験番号は、すべての解答用紙の受験番号欄に必ず記入してください。また、解答用紙に氏名を記入してはいけません。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の箇所に横書きで記入してください。
5. 配付した問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ってください。ただし、解答用紙は持ち出してはいけません。

〔I〕 次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

「補完と代替」の関係の具体的な例を挙げよう。たとえば、そば屋がその一例だ。われわれが 20 代から 30 代初め頃のことだが、突然、雨後の^{たけのこ}筍のように立ち食いそばの店が駅の周辺や商店街にも出てきたことがある。最初は、立ち食いそばだから便利さが特徴で、味はあまり問題ではなかった。中にはおいしい立ち食いそばも少しずつ出てきた。これで町のおそば屋さん全部席卷されてしまうだろう、町のおそば屋さんで 800 円のそばを食べるよりは、立ち食いそば店で 300 円のそばを食べたほうが良いと、当時思っていた。

しかし、これはじつは半分正しくて、半分間違っていた。たしかに、おいしくないそば屋というのは、安い立ち食いそばにどんどん席卷されてしまった。だが、そういう立ち食いそば店や簡便なそば店が増えれば増えるほど、じつは老舗のおそば屋さんの価値が非常に際立ってきたのだ。

要するに、普段はお腹にたまればいいし、まずくもないから立ち食いそばだけど、たまには老舗のそばを食べてみたい、たまにはこだわりのそばを食べてみたいということから、生き残った伝統的なおそば屋さんには人が殺到するわけだ。つまり、安いそば店や普通のそば店が広がれば広がるほど、じつはそういう老舗のそば屋や、こだわりそば屋の価値が高まるのだ。おいしくはない町のそば店と立ち食いそば店は、完全な代替関係にあるが、老舗のおそば屋さん、こだわりのおそば屋と、立ち食いそばは、むしろ補完的な関係が強くなる。つまり、いつも安いそばを食べているから、たまにはおいしいそばを食べたいという関係になっている。

このように、補完関係が成り立つところにはビジネスチャンスがある。多くのビジネスでもこの関係が確認できる。たとえば、鉄道系の会社を見てみよう。特に私鉄ではこうした傾向が明確だ。

その 1 つ東急電鉄の場合、電鉄会社だから、当然電車を運行しているが、東急電鉄という会社を見ると、沿線に住宅も開発している。かつての自由が丘、田園調布から始まって田園都市線の沿線へと、次から次へと住宅地を開発してきている。そして、そこに商業施設をつくる。二子玉川、たまプラーザなどだ。さらに東急は、その沿線に住む人々向けに、さまざまな事業を展開する。東急ストア、ケーブルテレビのほか、電力サービスもそれらの 1 つだ。東急電鉄にとっては、幅広いビジネスがすべて補完性があり、結果的に街が栄える。このように鉄道開発事業は典型的な例だが、ビジネスで成功しようとするなら、補完的な関係を探し、そこを強化していくことが重要だ。

出典：伊藤元重『ビジネス・エコノミクス 第 2 版』日本経済新聞出版本部，2021 年，pp.150-152 から抜粋，一部改変。

問 1 下線部「半分正しくて、半分間違っていた」とはどのようなことか、本文に即して 200 字以内で説明しなさい。

問 2 補完関係，代替関係とはどのようなことなのか，本文以外の事例を用いながら 400 字以内で説明しなさい。

〔Ⅱ〕次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

平均的な日本人の資産状況を見ると、預貯金の割合が非常に高くなっている。米国などでは株式などを組み込んだ投資信託の割合がもっと高いようだ。なぜ日本人は預貯金を好むのだろうか。それで問題はないのだろうか。

多くの日本人が預貯金を好むのは、デフレという近年の経済環境に適応しているという面がある。この20年ほど物価はほとんど上がっていないか、時期によっては下がることもあった。この時期には株価も上昇していないし、債券などの金利も非常に低い。結果的に預貯金で資産を持っているのが一番安全であった。(1) 結果オーライだったのだ。ただ、こうした資産構成が今後とも問題ないのかといえ、そうではない。預貯金という資産は株や不動産のように資産価格の暴落というリスクはないし、外貨建て資産のような為替リスクはないが、インフレが進行すれば資産価値が大きく減ってしまう。

(中略)

では日本人は資産運用のあり方をどう見直すべきなのだろうか。まず知っておくべきは、すべての資産形態は (2) リスクを伴い、そのリスクから逃れることは難しいということだ。株で資産を持てば株価の動きに翻弄されるし、不動産価格だって大規模な暴落が起きることもある。外貨資産は日々為替リスクに晒されている。現金や預金だって、大きなインフレが起きれば価値が大幅に減少してしまう。

どんな資産であってもリスクから逃げられないとすれば、私たちにできることはできるだけリスク分散をするということだ。すべての資産を特定の形態に集中させるのではなく、できるだけ多様な資産に分散投資すればよいのだ。そうすることで全体としてのリスクを最小化できる。分散投資こそが資産運用の基本である。

幸いなことに技術革新や規制緩和によって、様々な資産に少額から投資できるようになっている。一昔前であれば、不動産に投資しようとする必要資金は何千万円という規模になったが、今では不動産投資信託(REIT)で少額から投資できる。株式や外貨資産でも同様である。投資信託を利用することで少額での分散投資をすることも資産運用の鍵となる。

出典：伊藤元重『ネットニュースではわからない本当の日本経済入門』東洋経済新報社、2021年、pp.86-88から一部抜粋及び改変。

問1 下線部(1)「結果オーライだった」(結果的に良かった)のは、どうしてなのか、デフレの概念を説明しつつ、本文に即して、200字以内で説明しなさい。

問2 下線部(2)「リスクを伴い、そのリスクから逃れることは難しい」とは、具体的にどのようなことなのか、400字以内で説明しなさい。